



フィールド・レビュー

FIELD REVIEWS

ムハンマド一族の研究

森本 一夫

今日では15億にも及ぶとされる世界のムスリム人口は、預言者ムハンマドの一族（その多くは直系の子孫）とされる多くの人々を含んでいる。その数は少なくとも数千万には及ぶであろう。もちろん、その中にはありし日のサッダーム・フセインやカダフィのように、その血統の主張があまり信用されていない人たちも含まれるが、同時に、血統の真偽を云々することでさえ罰当たりな所業であると広く信じられているような、「本物」の人たちも含まれている。「サイド」や「シャリーフ」などといった尊称で他の人々と区別されるこれらムハンマド一

族の人々は、社会的には王から物乞いにいたるまでの様々な階層に、地理的には世界の諸ムスリム社会に、幅広く見られる。

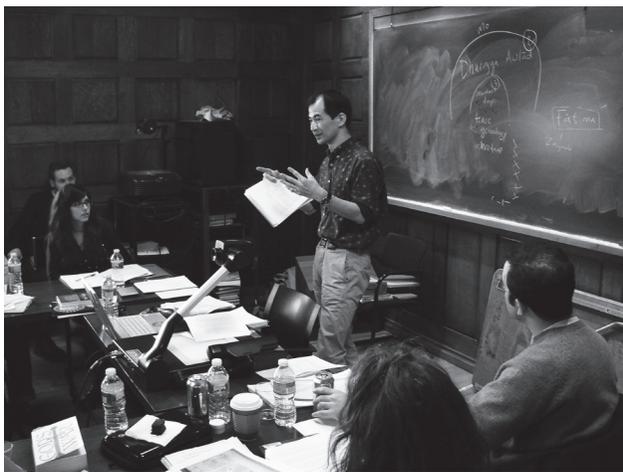
私は、地方名家の役割を通じて前近代イランの地域社会の成り立ちを解明することをテーマにして卒論研究を行ったが、題材として取り上げた10～12世紀頃のある地域において特に重要な役割を果たしていた家系がムハンマド一族に属していたところから、いつしかムハンマド一族の研究をライフ・ワークとするようになった。以下、私のムハンマド一族研究の狙いと展開を紹介したい。



ムハンマド一族の友人たちとともに（イラン、2011年末）

さて、上記のような経緯で1990年代の半ば頃までにはムハンマド一族のことに強い関心を持つようになった私を知るようになったのは、彼らの存在は広く知られているにもかかわらず（あるいはかえってそれゆえに）、彼らを正面から対象とした研究はほとんど行われていないという事実であった。この血統を帯びた者たちが何らかの尊崇や特別扱いの対象とされてきたことはいわば周知の事実とみなされ、預言者の血統をめぐる様々な言説や実践はどのように構築されてきたのか、それがどのようなネゴシエーションの場となってきたのかといった問いは、若干の例外を除けばほとんど問われてきていなかったのである。ところが私には、勉強を進めれば進めるほどに、このテーマこそがイスラーム研究一般にとって重要な意義を持つ魅力的なテーマであると思われるようになった。その魅力の拠って立つところは様々ある。この

テーマが、教義論のレベルで戦わせられる信徒共同体（ウンマ）における預言者一族の位置づけに関する学者たちの議論から市井における偽者の出現とそれをめぐる周囲の人々の対応という生々しいトピックまでを自然に含むものであることはその一例である。この特性は、（特に日本の関連の学界で顕著に見られるように思われる）イスラーム教に対する本質論的アプローチ（「イスラームとは～なものである」）を是正し、人々の時々の営為との相互作用の中で変容を蒙りながらも存続する一つの宗教伝統としてイスラーム教を捉え直していくのに役立つはずである。血統による権威づけや正統化といった現象が人間社会に幅広く見られるものであることも、同様に、イスラーム教の名の下で行われる実践をイスラーム特殊論とは一線を画しながら研究する際に有利な点となる。



プリンストン大での集中セミナー（2010年3月）

このような確信ないし思いこみから、私はより具体的なテーマに即した実証研究（系譜学の研究と預言者一族の地位をめぐる学者の議論に関する研究）を進めると並行して、「サイド・シャリーフ論」という研究上の枠組みの立ち上げを訴えてきた。実は、上記のような私自身の関心の展開とは別の文脈の中から、1998年、ローマでムハンマド一族を主題とした初の国際研究集会が開催され、私もそれに参加したのであるが、それ以後、会議の参加メンバーの中でこのテーマに一番熱心であった私が、

いつの間にかこの会議が灯したムハンマド一族研究の小さな灯火を守る役割を担うことになったのである。私は“Toward the Formation of Sayyido-Sharifology: Questioning Accepted Fact”という研究動向論文を2004年に刊行し、打ち立てられるべき「サイド・シャリーフ論」の枠組みやそこで問われるべき問題について議論するなど、ムハンマド一族研究の「世界第一人者」ならぬ「世界唯一人者」を称し、なにかにつけて彼らに対する研究が重要であることを訴えるようになった。

東京という、イスラーム研究の世界地図においては周縁と呼ばざるをえない場所を拠点にして「世界唯一人者」などとうそぶいても、特にそうしてうそぶいているのが私のよう

な軽量級の研究者の場合、その声はなかなか通るものではない。残念ながら、現時点においても私の訴えるムハンマド一族研究は、イスラーム研究の学界一般においてそう大きな認知を受



東京での国際研究集会（東文研玄関、2009年9月）

けるにはいたっていない。しかし、まだまだ頑張ってみようという気を起こさせるような兆しが生じてきていないわけでもない。ここでは私にとって大きな支えとなっている二つを紹介したい。その一つめは、例年3月にプリンストン大学近東学部が主催する集中研究セミナーの2010年の回の主題にムハンマド一族研究が選ばれ、私自身が依頼を受けて講師を務めたことである。このセミナーはプリンストン大学において平常授業が開講されていないテーマについて学外から専門家を招聘し、公募によって集めた受講生（若手研究者と大学院生）を相手に、5日間みっちり集中セミナーを教えさせるというものである。これは、開講授業のないようなマイナーなテーマとしてはあれ、ムハンマド一族の研究に一定の普遍性と重要性が認められた証と言えるであろう。

いま一つは、ローマ会議の「第2ラウンド」

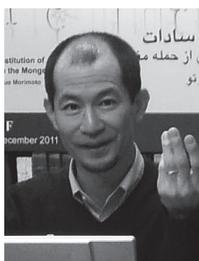
に当たる国際研究集会を2009年に東京で開催することができたことである。この集会は、発表者総数15名という決して大規模とはいえないものではあったが、関係者の努力と幸運とがともに作用した結果、様々な事例の個別呈示を目的としそこから踏み出すことがなかったローマ会議をこえ、今後のムハンマド一族研究に対し新たで確固とした一つの方法論上の出発点を提供できたのではないかと考えている。この研究集会での発表論文をもとにした論文集*Sayyids and Sharifs in Muslim Societies: The Living Links to the Prophet*も、いままさに校正作業が進められているところであり、この小文が刊行される頃には出版間近となっているはずである。期待をしすぎるのは全く愚かなことではあるが、世界のそこそこで、少しは何らかの反響を得ることができるのではないかと考えている。

以上、研究内容それ自体の紹介というよりは、自分はこんなことを頑張っていますよという自己宣伝めいた内容になってしまった。ただ、ここに記した内容から分かるような私の志向は、日本のイスラーム研究が徐々に示しつつある変化を反映しているのではないかとも思う。一つは（西洋中心的なモノの見方へのアンチテーゼというような意味合いで）「イスラーム」それ自体を一つの完結的なシステムとして探究し（場合によっては称揚）するという姿勢から、イスラーム教ないしムスリム諸社会を人類が形成してきた様々な宗教や社会の一つない

しー類型と捉え、そこに他の宗教や非ムスリム社会にも見られる様々な事象の独自の（あるいは独自でも何でも無い）現れを見出していこうという姿勢への転換である。いま一つは、国際的なネットワークに乗せることができるような水準と文法で研究を行おうという構えが年々強まり、また実際にそれを可能とするような水準にある研究がしっかりと増加してきていることである。昔、ある日本人イスラーム研究者が、日本においてイスラーム研究が生き延びるには何かのアンチテーゼとしてイスラームを呈示するしかない、と述べているのを聞いたことがあ

る。そうでないような研究、イスラーム文明なりイスラーム教なりをごく当たり前の研究対象として捉える研究が、地味にはあるが育ってきているのである。これが生き延びていけるか

は、我々イスラーム研究を担う者が真剣に考えなければならないことであるのは当然であるが、同時に、日本社会の文化的な懐の広さとも関わる問題であるようにも思われる。



森本 一夫 (もりもと かずお)

1970年福岡県生

【専攻領域】イスラーム研究、イスラーム史、イラン史

【著書・論文】

Sayyids and Sharifs in Muslim Societies: The Living Links to the Prophet (edited volume: Routledge, forthcoming in 2012); 『聖なる家族：ムハンマド一族』(山川出版社、2010); 『ペルシア語が結んだ世界：もうひとつのユーラシア史』(編著：北海道大学出版会、2009); 『シーア派の自画像：歴史・思想・教義』(訳書：慶應義塾大学出版会、2007); "The Prophet's Family as the Perennial Source of Sainthood: Al-Samhudi on 'Ilm and Nasab," in C. Mayeur-Jaouen and A. Papas (eds.), *Family Portrait with Saints: Hagiography, Sanctity and Family in the Muslim World* (Berlin: Klaus Schwarz Verlag and CNRS, forthcoming in 2012); "Keeping the Prophet's Family Alive: Profile of a Genealogical Discipline," in S. B. Savant and H. de Felipe Rodriguez (eds.), *Genealogy and Knowledge in Muslim Societies: Understanding the Past* (Edinburgh: Edinburgh University Press, forthcoming in 2012) など。

【所属】大学院情報学環(兼)東洋文化研究所

【所属学会】日本オリエント学会；日本中東学会；史学会；The International Society for Iranian Studies など。

『東京大学大学院情報学環紀要』 投稿規定

- (1) 東京大学大学院情報学環教員等（教授、准教授、助教、客員教授・准教授、研究員等）は、本紀要および英文紀要に論文を日本語または英語で執筆することができる。
- (2) 東京大学大学院学際情報学府博士課程在籍者および東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在籍者で大学院情報学環教員を指導教員としている者は、論文を日本語または英語で投稿することができる。大学院博士課程学生の投稿論文の採否は、図書・出版委員会が指名した情報学環教員と外部の委託された研究者による査読を経て、図書・出版委員会において決定される。
- (3) 執筆及び投稿される論文は未刊行のものに限る。定期刊行物（学術雑誌、商業雑誌、大学・研究所紀要など）や単行本として既刊、あるいは、これらに投稿中の論文は本誌に投稿できない。但し、学会発表抄録や科研費などの研究報告書はその限りではない。
- (4) 投稿する者は、指定された期日までに、執筆要項の諸規定にそって作成した原稿をプリントアウトしたもの2部およびそのデータファイルのフロッピーディスクやCD等を、東京大学大学院情報学環・学際情報学府図書室に提出しなければならない。
- (5) 本紀要に掲載された論文は、大学院情報学環のホームページで公開される。

『東京大学大学院情報学環紀要』 執筆要項

執筆・投稿

- (1) 執筆・投稿に際しては、東京大学大学院情報学環・学際情報学府図書室のホームページ（<http://www.lib.isics.u-tokyo.ac.jp/index.html>）に本投稿規定と執筆要項に関連する最新の情報が掲載されているので必ず参照すること。特にテンプレートに記載された細則に注意すること。
- (2) 原稿はA4版、横書きを原則とする。1頁は40字×34行。パソコンで作成する。
- (3) 分量は原則としてA4版で打ち出し10～30頁とする。大学院生の投稿の場合はA4版で打ち出し、表紙・英文要旨を除き本文14頁以内とする（注・参考文献・図表を含む）。枚数の上限は厳守すること。
- (4) 執筆要項に適した書式のテンプレートを東京大学大学院情報学環・学際情報学府図書室のホームページからダウンロードできるように準備してあるので、これらの雛形を用いて執

筆・提出を行うこと。

ファイル形式

- (5) ファイルは「Word」または「一太郎」の文書ファイルで提出すること。併せてプレーンテキストファイル形式で保存したものを提出する。その際、改行コードは1パラグラフに対して1つ入れること。表示行に対して改行コードの入ることのないように注意する。論理行に対して改行コードが1つとする。
- (6) Macを用いて執筆した場合は、提出するフロッピーディスクはDOS/Vフォーマットを使用すること。
- (7) フロッピーディスクのラベルには、論文名・執筆者名（複数の場合は代表者）・使用したワープロソフト名を明記すること。

全体の構成

- (8) 論文は、「表紙」「英文要旨」「本文」からなり、この順番で構成される。図・表は本文中に組み込む。
- (9) 右上ヘッダ部分に、通しのページ数をふること。
- (10) 1頁の余白は、上25mm 下30mm 右23mm 左23mmに設定する。
- (11) フォントはMS明朝10.5ポイントを標準とする。
- (12) 字句・叙述は簡潔・明確にして常用漢字、現代仮名遣い、算用数字を原則として用いる。

表紙書式

- (13) 表紙には、日本語の標題、著者名、著者の所属を、和文および英文で記載する。また主要著者の連絡先、研究助成に関する記述、謝辞、共同執筆の場合の執筆分担なども表紙に記す。
- (14) 日本語の標題は30字以内とする。副題がある場合は、「-」（ハイフン）の後に主題と明確に区別する形で記載する。その下に著者名と著者所属を日本語で記す。1頁目の日本語標題はMS明朝12ポイントで記す。
- (15) 日本語の標題、著者名、著者所属の下に、英語での標題（主題・副題）、著者名、著者所属を記す。英語標題は、筆頭語と主要語の頭文字を大文字で表記する。また英語の主題と副題は「:」で区切る。
- (16) 著者名の英語表記は原則としてFirst name を先とし、頭文字を大文字にする。日本名のローマ字使用法は執筆者の慣行を尊重し、統一しない。
- (17) 執筆者の所属に、教授・准教授・助教その他の別を記す必要はない。共同執筆の場合の記

載方法詳細はテンプレートを参照すること。

- (18) 標題、著者、著者所属に続けて、主要著者の連絡先、研究助成に関する記述、謝辞、共同執筆の場合の執筆分担などを記す。

英文要旨

- (19) 英文要旨の頭に「Abstract」（ゴシック体）と記す。
- (20) 英文要旨はA4版で1～2頁とする。英文に関しては、特に記述に注意し、執筆者の責任において英語を母語とする人の校閲を経ること。
- (21) 英文要旨の下に、キーワードを日本語と英語で記す。日本語キーワードは「キーワード：」に続けて6つ前後記す。日本語キーワードに続けて、英語キーワードを「Key Words:」（ゴシック体）に続けて記す。キーワードの筆頭語および主要語の頭文字は大文字とする。各キーワードはコンマで区切り、最後のキーワードの末尾にピリオドを付ける。

本文書式

- (22) 本文の開始ページの頭に、日本語および英語の標題を記す。
- (23) 本文中には、数字・記号を用いて章・節を設ける。章にあたるものは「1. , 2. , …」（全角数字及びドット）とし、節にあたるものは「1.1 …, 1.2 …,」（半角数字及びドット）とする。以下これに準ずる。章題・節題、強調部分は、太字ではなく、MSゴシック 10.5ポイントを用いること。

例) 章題の例	2. 携帯電話利用実態（全角の数字とドット）
節題の例	2.1 利用頻度・利用料金（半角の数字に全角スペース）
節以下の例	2.1.1 男性の利用頻度（上に同じ）
	2.1.1.a 男性の利用頻度の詳細（上に同じ）

- (24) 目次は、原則として各論文毎には付けない。但し、学位論文の一括掲載や長編の調査研究論文などの場合には付けることができる。
- (25) 本文中における外国人名などの固有名詞は、原綴りあるいは英語綴りを原則とするが、公式の名称として著名なものはカタカナでもよい。
- (26) 本文中での参考文献の引用は著者姓と発行年をつけて次の例のようにする。著者が3人以上の場合には初出の際には全著者の姓を書き、2度目以降は第一著者の姓を書き、和文献では「他」、欧文文献では「et al.」を書き添える。

例) Rumelhart, Hinton, & Willams(1980)は…
…と主張している（丸山・田中・谷口, 1998）。

- (27) 査読にあたっての匿名性を確保するため、自己の既発表論文等の引用にあたっては、「拙

- (39) 各論文執筆者には別刷30部と掲載誌3部を配布する。
- (40) 本投稿規定及び執筆要項の改正は図書・出版委員会の決議を経なければならない。

著者紹介の執筆

- (41) 論文の掲載が決まった著者は、著者紹介と自分の写真一葉を提出する。著者紹介には、生年月や出身大学などの履歴、専門、主たる著書・論文、所属、所属学会などを書くことができる。

附則 この規定・要項は、平成21年1月16日から施行する。
東京大学大学院情報学環 図書・出版委員会

東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究 No.82

印 刷	平成24年3月26日
発 行	平成24年3月26日
編集・発行	東京大学大学院情報学環
郵便番号	113-0033
住 所	東京都文京区本郷7-3-1
電話番号	03-5841-5905
ファクシミリ	03-5841-5916
E-mail :	tosyo@iii.u-tokyo.ac.jp
装 丁	木 下 弥
印刷・製本	株式会社創志企画